





棋賦



風狂文艸卷之二目錄

- 一 徒然賦 てんぜんのふ
- 一 棋賦 ごのふ
- 一 芝居賦 しばいのふ
- 一 憎孔虫賦 あひちゅうのふ
- 一 牡丹餓賦 がとらしのふ
- 一 節季賦 せうきしのふ

風狂文州卷之二目錄 終

風狂文州卷之二

○賦類 ふのふい

徒然賦 たれくのふ

此賦摸善好徒然草

ほもくさるまに。日ぐさ。世乃ふじうい。ん。ん。
 うり行よ。ち。ま。そ。こ。ん。う。と。れ。く。あ。い。つ。
 ら。も。ば。あ。う。く。そ。物。志。あ。れ。い。て。お。け。世。に。じ。ま。ん。て。る。
補が ねり。あ。う。べ。り。ま。あ。そ。ま。か。の。色。貸。徒。者。の。身。に。亮。
 も。め。く。く。出。入。の。お。の。と。清。紫。も。ぐ。美。之。れ。神。さ。
 む。ぞ。や。ん。ご。と。た。ん。堅。子。あ。が。り。の。み。代。を。ど。お。屋。徒。

僕結りたきんちゆーとる。侍女半湯食俾もてて
 あれいすれど。控は是う。さきより心下へ行に付け
 付ふをく。志ざら親するもふ吹色乃ゆりあや。侍女
 にもあねらどさふう。奥なる者むらう。やち
 かつぬものも地とく。人ふ破腹乃やうゆあられ。腹に糞糧
 の穢を痛くといひ。まゝなる事ぞう。ち後奴
 の穢にいりまらに付て。いも。とんてに。此九歌がい
 らんやうに。火ふじ久夜も食れ。火をてたうけり。火ふは
 禁免。よ遠かんと。是ゆ。せと。後のは歌人の中。馬耳
 の東風うら人まかりかん。人々。意を。派社の心すれと。

してわはゆり。あふり。銀うら。飲あふら。はつひあ
 ぐ。衣形ありま。泣く。ひさ。あふ。厭む。向ひま
 一。乃。賃。徒。者。と。是。れ。人。の。乱。の。皮。剥。つ。ど。幸。性。ア。て
 て。は。そ。の。あ。う。り。れ。奥。は。あ。れ。も。心。か。ど。り。置
 せ。より。置。き。い。ら。ふ。ん。ん。ん。ん。身。侍。り。た。人。も。才
 好。く。銀。き。か。り。ぬ。も。は。ふ。ら。張。三。本。四。にも。立。立。く。
 ち。ま。だ。氣。け。ま。り。て。そ。幸。え。た。事。な。れ。あ。り。た。事。を
 強。し。て。屋。の。又。付。款。も。幸。向。旅。の。好。た。者。な。れ。友
 信義。好。人。に。立。接。て。せ。り。人。に。渡。ち。し。こ。も。い。い。ど
 かん。り。も。才。知。は。さ。う。と。ど。心。な。後。に。や。し。く。音。を

らぬものうらやみ眼をぬ男のよもは。我身の和を
のしやう。明言いふ事人といふふらう。さ
かす。うらやみは世をこころ。同雅のさしねくが
ほもくを何にら。こころをさし。方のあし。作ては
とら。さし。うらやみ。寧ろ。さし。鯛と呼は海り。は

棋賦

物の盛衰。其物のけをけり。と。其ふと。は。けり。
夏に。さし。けり。帷子の。けり。けり。けり。けり。けり。
の。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。

に。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。
を。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。
菓に。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。
乃。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。
埃の中。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。
て。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。
茶。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。
を。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。
と。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。
棋。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。

更に進めり深ふに甚勝孤疑して。芥の柵り打ちし
をたし。千尋の老を忘る。一踏の菓を録も。くらに
半石れ時ふさくと。如く其象をり。二百六
十一の方地に。後十九れ踏を通す。月乃星急あど
中。一るの東道わめ。う也。盤面に対し。争んで。一子と
下とより。既に生記の傍をわり。漸に方口函に敷ド
て。存亡の安危を現ど。吾実乃手勢千に。受ず可よ
に。白れ方に。新らじ。氷の上をたど。凡情あまは。
思に。色又月。若小。鳥の。秘。づ。を。も。と。じ。り。氣。色。あ。り。あ。南
の。凡。急。り。れ。が。東。小。乃。る。海。と。も。も。客。人。乃。進。く。に。お。叙

く。謝。宴。ら。み。吹。さ。い。ふ。や。育。き。ん。記。心。を。後。あ。て。あ。い
け。り。ゆ。を。お。し。へ。韓。信。が。背。水。の。陣。勢。と。や。ふ。べ。い。一
子。乃。困。と。あ。ん。と。を。征。行。ふ。や。り。月。を。白。志。と。し。く。少。壯
を。遊。ば。ま。き。よ。味。方。小。續。と。や。ら。ま。は。り。育。振。と。あ
ぐ。に。思。白。乃。虹。の。懸。録。と。も。中。又。に。横。り。と。し。
淮。肥。小。政。行。符。雲。が。う。あ。後。乃。不。定。め。と。下。よ。り
永。金。百。子。を。換。と。も。や。り。風。く。困。を。切。て。出。り。が。ふ。一。月
乃。命。を。終。て。も。勝。負。の。大。知。る。謝。玄。が。定。子。を。地。さ。る
例。より。一。懐。握。と。休。云。乃。さ。く。持。棋。れ。不。定。に。あ。く
勝。と。と。れ。と。も。汝。の。道。に。あ。る。に。子。較。り。運。速。を。計。す。

かりそ先に脱用をさすを説道乃ちいふ。俗に
 如來と云ふはあつり。あつりの遊佐乃一子味方の陣と敷
 くるに繞ぬるはく。又徳子あり。十子を棄て敷いざら
 せのり大石を罫敷にあり。幸半ありんを補ふ者
 多し。後とんとあふえられたにあらず。名案の柄に煙の
 を握り。又小舟首をかむ。吸口を閉て一を不記
 に。右実を計れば。後口敷小舟あり。さむい一をれ。攻
 合乃あつらるる。いんをも急り乃遠方に棄れ。其
 あり脱用をさす。さる勢小幸も同じをて。若り切と
 る。能る其甲斐あり。一を乃塵り。詮るは一月とほれ。

いさいさく。それば。破産に思ふ中に。白
 油の大名のせあり。若くは傷とら。子のは
 つさ。いよ。勝つ。乃。真。安。の。平。の。凱。若。小。は。ね。負。て
 乃。汗。を。麻。黄。桂。枝。乃。切。り。す。も。あり。王。中。良。を。計
 いて。せ。せ。せ。で。中。法。と。陶。侃。の。牧。奴。の。敵。と。敵。を。す。す
 たり。き。も。情。依。誇。心。路。を。鏡。め。ま。を。忘。り。便。と。ま。り
 つ。さ。け。物。の。蓋。を。ん。百。八。十。乃。日。を。い。づ。に。喰。は。す
 ぐ。日。を。用。ゆ。り。可。も。ね。く。彩。流。に。そ。く。後。の。う。ん。凡
 に。せ。り。死。す。法。非。中。乃。る。を。約。して。若。く。後。人。り。
 せ。り。て。棋。盤。の。用。を。せ。き。う。し。と。孔子。の。後。い。も。保。

その路を孟子に問ふ。強居己の道。ふか
し。其時乃不仕。合とて。本野狐の足名。思し。
恋ひに。わく。日夜のつら。馬の妻。も。小豆。餅
も。つ。ま。人。ど。飲。酒。口。に。流。く。喰。物。痛。み。嘆。に。む。し。
仄。燈。可。を。定。火。の。い。ま。病。の。專。に。灸。を。し。人。枕。う。い。と。も。
ま。い。も。ま。人。福。が。流。く。ま。ま。可。わ。く。一。心。を。り。
し。ま。は。死。名。を。か。り。ま。ま。生。る。何。喜。ぶ。都。て。生。死。喜。怒。に
ま。ま。可。わ。れ。ば。吾。心。の。は。淋。に。も。也。ど。縮。み。に。之。子。を。焼
し。又。一。路。を。通。し。て。始。と。一。般。塵。を。わ。く。り。黒。白。未。分。の。時
什。麼。小。の。路。名。を。ま。ん。後。の。十。九。乃。路。徑。小。を。恋。ふ。人

同。美。す。人。の。だ。友。吏。一。心。を。あ。か。ら。く。沙。門。の。名。を。斬
し。又。二。乃。若。話。も。あ。る。を。也。蘇。以。技。使。乃。服。用。と。持。く
公。の。物。言。と。り。る。し。

北之居賦 並引

此賦擬杜牧之何房宮賦

芝。若。を。其。始。年。ち。り。り。神。代。に。天。鈿。女。命。能。傳
し。結。み。り。け。り。り。有。ね。院。永。久。乃。以。し。い。流。の。子。威
舞。狐。姑。む。を。由。縁。り。と。めて。八。重。く。り。出。ま。に。九。二。と
之。如。白。拍。子。鼓。舞。妓。を。招。し。り。其。凡。々。人。不。見
ぬ。又。障。障。隱。を。小。野。於。通。が。十二。段。を。完。初。し。し。

滝野は角二檢校が書帯に参り。當若佐法司
の長入道が平家物語を生かして肝がかりに歌
へ。歌に芝居を續と其詞に曰

六十餘石はつて四海一なり。芝居突として樓上り。十
解万をせしむ。核ふた清く天目を驚かす。核
最東ぬにかまへも小に折了。並に舞臺小鼓をり。
本之に鼓こくと見物鼓い入。又安に札あり十歩小
怯付あり。正る乃破れさす。さるるに新鼓をく歌
く。座本の紋取日法に映して。金く雲く銀く雪
をり。半巻満布く高場さるる。いよ中なる見物

其券百千人をさす。紅く毛纏を定海より出乃
紅葉を吹きく。氣色にえれ。後けりの色矣如と
る。柳椽のふれふれに似たり。舞臺の住味よ古を鼓し。
提堂乃酒の香に舞臺をやま。付舞臺の座中に卧る。
未どまあつざらにいらる。幕を捲幕の座小鼓の音さる
ぬいりる。ねぞ。平場迷窓して味を居ぬ。定を伸との世
をあつそよ。系屋にやのうく之弦を。撥多小和しく洋
し。小鼓清操理乃喜音に喜音を系乃情をさるし。
甲乙の調の小梁の音を併り。も入乃小鼓を志す
一見。せりぬに是地のか別あり。一日の中あり一辰は熱

りてじべかす。いんげん。後家らあいの種あり。その原より
おろく。一。兼意乃月家。をいふ。小愛。一。野良れ。名。下者
ちろ。金銀を扶。一。家財をわ。じ。れ。半女。色。り。も。ま。ど
一。好入り。一。表。じ。い。い。ぬ。あ。す。と。世乃乃人。あ。も。と。表。じ。
せ乃乃人。長。んで。戒。先。と。ん。は。亦。世乃乃人。そ。と。後。せ。乃
の人。を。表。ま。志。め。ん。茲。に。果。を。鼓。を。う。ち。て。さ。う。か。く。
明日。を。ま。し。つ。の。と。

憎にくむ虫むし賦ふ

此賦此賦撰撰改改陽陽公公蒼蒼蠅蠅賦賦

虱しよ虱しよ。秋あきほく。汝なが。生なる。方かたを。嘆なげく。既いに。蟥いもの。計けいも。さ

いじう。う。り。を。や。あ。河がの。口くちに。色いろを。馳はま。精せい舎しゃ乃の幸しあり
蟥いもあ。う。そ。い。嘆なげぬ。色いろは。中なじ。心こころも。涙なみだか。ぬ。牡丹ぼたんと。初はつ
あ。て。ぬ。う。と。ま。と。呼よん。も。風ふう流りゅうり。た。ら。る。も。や。あ。れ。べ。一。
牡丹ぼたん候こうと。も。ひ。う。り。を。や。と。候こうと。ほ。先ま。あ。ら。の。但たが。と。器きせ
既いに。い。つ。か。ら。い。と。さ。る。と。若わかの。行ゆき。う。ん。夜よ舟ふねの。あ。と。名なの。い。つ。の
乃のに。ほ。く。と。も。あ。く。ば。故ゆ乃の連れん秋しゅうと。付つぬ。を。表あらわす。美みに。懐なつき。
ど。い。能よく諾やく。肝かん乃の名な付つき。う。ん。一。ほ。く。と。白しろに。親おや一。か。く。と。杵きね
小こ疎そく。一。播は豆まめを。好このむ。小こ桶かじと。啼なく。播は木きを。凍こ終しゅうの。友とも
と。小こ豆まめに。身みを。か。し。て。に。招ま衣え乃のう。り。う。り。う。り。く。豆まめ
乃の粉こな小こ豆まめと。う。り。く。ふ。吹ふの。由ゆ縁えん白しろ屋や乃のち。ち。黄わう朴ぼくあ。し。て

官をせしむ。あゝ色をいといてや。九折してり終せ
 ぬ。宋玉何晏が素秋のまかり。一匕乃砂糖に十を
 凡味休置。老人塞ちの古鼓書息さしてや。あ
 かり。あゝあるといふ。七月の屋舎去に一世の業と見え
 ぬ。重ぬ相を踏と。食菘に御して威勢更に猛なり。
 りの時うや加帳と美名せし。付下もあり付ぬ下も
 と不徒かへべ。之を遺作乃便利法なり。将くと
 づし。る。貧乏に鈍なりぬもの。ちど悪女乃自らを言
 んとて。柳より落れが。腰とく。字と人ほし。と。そは惜
 くらもあらず。

節季賦

仍年乃帯季の絶どして。志と奉の帯季にあはれ。
 あら玉の年をむ久之えり。日も跡なく。言て。梅月乃
 日影。菱盤の柳を走れ。月の嵐定とや。弥生乃事と
 又ば。曉の美を。雛洞度乃。美智にあはれ。小坂。控え
 ぬ。じあ。一報を。ほくの。いざ。ば。茶屋。小姑。籠。其。蔭。乃
 顔色。あ。く。強。され。危。中の。交。一。難。さ。う。や。日。比。の。地。益。教
 と。い。け。く。六。道。乃。強。に。も。斜。又。せ。う。お。け。の。け。日。を。く。べ。し。
 や。や。う。増。の。智。を。あ。れ。は。ゆ。人。か。り。の。衣。も。袖。う。す。く。

甚夏の入人志づりせどあはして。時香乃初若めづりしき
 万も如く。あこれ形のはらに若葉ふきつりし多。形氣
 を折ふ例あはば實そりを折ふ日いつる。機甲のまゝ
 よそぞい戦場の心地やせま。惣た乃性未急ししく。
 不坊乃門を責めこ。まめく怒鳴くこして周の勢りい
 せり。金銀のそ勢をまゝして多勢乃借款を防ぐ計畧
 さめくあり。あついで日そのづく悔を約し。又と後結乃金
 銀をたれども有がぶく。と寸の舌戦とりどあして。後強
 が惣河の流もいたぶよさわく。若紡布乃中に一言の約
 を入る陣を引もあり。あついでるををほく。地取り

伏して假役の務を脱き。又と作病の奇計を紙帳
 乃中にめづりし。松方を十日乃外に定む。人心の志実
 け日小形も最そのにぞこさし尾を以て半能り守。そ
 色より氷室乃例もさく。何れも神半の張い洋く
 こして耳にみたり。夏越乃夕時くらり。若和の六十串
 川邊に捨全。初秋乃あふとつ。若去実の物物うき
 時瓜若も。そま待つら七夕乃色夜を明もりく。
 ら死人の舌あつ十二日乃落首。十万位去よりそりく
 と。麻ゆり乃杖を引はきて。せりも時分のあ人達
 惑わく。食熟して。其後の血加子。もた落し。此は掃

其深乃麻梨口にわらふや音やがて候ま超乃貴院服
 かいくあしん。こ色より芝米うとこ。十日の明がのよりあ
 山に目をゆくむ夕中。六時の際乃約りらあくされども。
 不老門の一日よりあくそんらるる世乃一般たへべ。廿日
 とふふの。幸に強と強強乃流をくそ色れ水窮り
 あくぞれゆきも乃控録も。莫はせり乃小鯉をそんきり
 方に寄交り足を運じてむれき材布と根も味も
 を強とみ彩屋。揃にるるにあふく。そまにこりむぬの。
 物身にあむ秋乃凡。目にはくぬ物小舟どるくれぬる。
 何方もそあふくわぬ賞物揃兼用乃粒もづれぬる。

いん方るれい貴家の若も。うき世を秋乃初時ぬる
 で。うらふ色の深物代。おりの袖に金葉の流きて子さ
 目もくらて。紅葉て落れ八月乃神と日彩乃控録の名紗
 も今方りにせぬり。田の実れ程い程あり長月乃帯帯を
 むくく。葉に尾を物とハ盆中のゆとくふにあふく。
 丹波桑の刺してさけ付の控録を中ねに納すれば。もや
 神の月の本がうらうらたき。吹とく。葉夜よりさゆれ
 銀の巻はを待まがわ。田舎へかり初者人乃あふく。
 先。あふくがわらわのま乃子候。月にあふく日小意と底に
 守む程いあふく。借法中の一物。程急小あふく。そのあふく。

のさあ人ぬと小長月乃あう一たぐ。岩乃砂水れあふ
 ぞむ。うん水乃さうめゆるさこば。吐乃乃透にさこむ
 そのさ賞そりの通路をたどり。名ありあふ水乃冥と
 越れと。世に傍跡乃冥と通りかぐ。さる且て言
 を世と文私に兼用して。あさやぐの傍八百を皆はれ正
 号う香怪小信たてゆりや吾や是米れ。我月じひ久
 は世乃物さ。板屋のあられあう。ういさるさ。者のあれ
 救わして。さぐれの氣色あられあう。さ大奔の勢冒火
 煙の金と。皆人こざうとわくがさあう方もち。月日
 よくまど師走にさこば。こ子朔日歳忘れ。食高あ差

のどく幻に似たり。花乃鏡小方の藤つさう芳がく。く
 門松あうろ免縄乃りやとさ。小丸はぎれ。何れとさく
 心せり。く。花紅葉のり跡をる人もち。大海日
 乃日にさき。身とあまの丈軍たかりあり。次方あり。遠
 に鷲鳴の計其詮れ。素乃款を母さうの悔甲
 ち。實証に委をく。してさ書物。の波にゆれ。傍跡乃
 深海小海。門口に。新紡布の糸をさび。埋信乃
 指をほれ。量。借便乃。悪の勢を揚。東るに。弛遠。い南
 小小。猛にの。あう。わく。た遠の勝負を。一日に
 改せんと。守。時に。決乃。花をら。さ。歩小。判の。武。者

づり坊人の目ざとを欺りて。丁銀の裏にふるを天秤の
 下んくふるに駒きつらて。欺味方の耳をさやまし。小
 玉の飛ぶふさぬを。我身よりあぐさ出る玉と見入て。銀
 袋の腹を恨む。難言まぐろ。瑞鏡の高名をこくたう。は
 金銀のよみてをてて。つかを屋の欠を捕あ。その合の四に
 先を。適等の債とめく。身を委ぬ。使用乃士率
 能の純とつらんや。相場軍令にせし。志うその負の
 夢人の乃香にして。お人の勝を引目強にすけりきぬ。
 夢香を遣ものを良將と。夢香小遣るもの狐息
 将と守。よく金銀の利去を個練して。借鏡の強款を

くらぬ。その上よりあ。古帳にぬけり。不坊乃ほ名をさむ
 ぬ引捨の墨点をゆりさる。多借乃高名は一挙り
 あつて。其身乃むも。秘定の元身一なり。ほくくと
 一瓢の世侍を水汁。その言ささば。一張乃茶代をく。い
 あつて。魚憲がつじ。ほも味。喉痛乃用。忘るある。一。其
 叙足が。その陽の萩を捨い。喰にせし。人周の僕物と
 著し。も遂に清の字を暮。法を母。肌死せし。あつれ。小
 腐ぬ。一。鳴呼。借鏡の瓢。く。る。曇埃乃。ぐ。一。折。し。り
 ち。と。つ。て。又。生。に。壽。祿。解。ら。あ。る。人。の。論。を。守。氏。家。を。上。の

つてあつてもさへつての事の新あり。兼大根乃流るるに厭は
れ其の流をさへた。騎奔乃門を穿。常に候約乃やま
て熟乃なく若小。其日の活計をさしめせよとて
おしとて常季の若患を逐れらる。恐くくう天道と
さうと也。衆くくう我志る所にあつた。

風狂文州卷之二 終

く奴の痛も久くと。虎豹乃血もあれば奈埜のぬきもし。
まゝに人のおさもも守。何ぞ人乃喜びをさへた。
汝が死のつらも小くして突歎を極りけ。襖袴のさ
たもに任りけ。埜子乃林路の整ふよりあや。菟波ふ
乃ける彼るに子と強くうと人をおふ。之世一侍れお後
乃らめも身乃をよとせり。孤生の花見風をいふやれ
凡雅の心ありてうよとん。千子教者乃かり名とさうとく
む。汝がざらくに老らるの夜をさへむけ。眩枯一睡
の愛の汝がうらぐ小破れぬ。奈合取乃からはく。好湯
る人の衣帯にかけはつれて。とてうらむと千里の旗に

おろしく虫敷の雲物死生受米なり。我はくく汝が生
 ころを銀よ奈々藝妓乃いささきより生し。天お承子の厨乃
 いされより生に汝々何のいささきあるん。東坡の垢獄のいさ
 きと。秦州遊々綿装乃いさしと守。垢獄を身と
 綿装を脚と以と判りせしむ。いさしと守。垢獄を身と
 べし。食肥て新事進むと。盡勝病病人乃あぐく。あ
 にささし肌きりさぬの柳装の凡に洗ひ磨ぐごとく。
 紅唱が的にかりて死しとを悔きたや。沸湯の着をすてま
 ぐもさるの心言が洗乃種なりきや。汝死に任ていさく
 身に忍ていさく。黒白愛化乃屋を汝も志しに我も

志しと。世人花子を汝がまをを若も曲舗古の雲々
 汝がわさ恨恨に世人中へくい必が仁をわする元を
 かに分る忍ぶにほきかほいも有す。血され乃性
 生に汝が奈忍を正と刑け也。虱よ虱よ我はくく汝が
 生しるを忍び。教を引友をあらわく。接鼻乃丁字結
 に去し。頰をく小作の色飽までに喰ひほに生れ送死
 既に禁のわら多判刀乃研をわらえと。勇者の袂に入て
 慄く志しとも。善鳥頭百部根乃教業を防ぐ事能り。
 たしと。遠きく屋原が袖に入とも。洞死乃水小舟を
 さしと。舟子指が此小舟とも。火に入ゆ禁さしと。

向と瓜ちんんと歌とも独り。裏をちんんと歌をた
及つ。歌はがぬまを記をあつて。はが柔魚を魚む。但
はが性のはとを記を歌くへ。

牡丹餅賦

母子ほと流すにやとむはを葉の候といふを。あつち
美乃候といふ。昔に葉の名をわたり。之妙といひつる
錦に足物にて。花に真あれ。木野の名物とちり。花
乃記を。結更よこい。るる候乃名あつて。いつての歌人
喰そくくわつるを。はが仲の都乃古。不せし

